

バイ・  
ザ・ウェイ

text by Haruko Ohta  
illustration by Yasuko Yamada

暦上の「立秋」が過ぎてまもなく、小田急沿線の成城学園駅前の並木道を、久しぶりに娘の万里子と歩いた。もう夕方の時間だというのに、並木の桜のみどりはつややかに輝いてみえた。やがて、秋の深まりと共にこの並木は紅く染まり、そのまま落葉となる。私はこの街に、母と二人で住んでいたことがあった。

今から三十年前の晩秋の夕暮れのことである。私は、この並木道を一人呆然と落葉を踏みしめながら歩いていた。母の肝臓の手術を数日後に控えて、悪い夢をみたのである。母が、この落葉の上に一匹のひきがえ

## もみじ

作家  
太田治子

て思い到らなかったのか。「ママ、ごめんなさい」

桜並木を万里子と歩きながら、私は思わずそうつぶやいた。彼女の前で、最近よくその一言を声にだして

いってしまうのだった。

「静子さんと、あいたかった」

万里子も、いつもの言葉を口にした。孫の彼女は、私の母のことを名前と呼んでいた。万里子が生まれたのは、母の死の五年後のことになる。晩年の母は、婚期の遅れている娘に向かって一日も早く結婚して、おかあさんになってほしいといひ続けていた。もし赤ん坊の万里子の顔を見たら、どんなに喜んだことだろう。娘の高校生の時から母娘二人の生活が始まった。だんだんと、その性格が私の母に似てきた。のんびりとゆっくりふんばっている。ふわふ

わと心が揺らぐ母親の私を、時々注意する。そんな時、娘の顔が母の顔のようにみえてくる。「ママ、ごめんなさい」と万里子に向かっていってしまいたいことになることがあった。

並木の桜の木は、三十年前よりもまばらになっているような気がした。植え替えの時期なのだろう。とある家の庭先に、みおぼえのある低い楓の木があった。紅葉を待つもみじの葉の一枚、一枚が、母とこの街にいたころといささかも変わりないように茂っていた。

「まあ、赤ちゃんの手のようにかわいらしいこと」

赤いもみじの葉をみつめながらの母の言葉が、よみがえってきた。ふと、どのもみじもすっかり紅葉して、優しく笑いかけてくる心地がした。母の笑顔のようにみえた。

おおた はるか／神奈川県小田原市生まれ。明治学院大学文学部英文科卒業。1986年「心映えの記」により第1回坪田譲治文学賞受賞。主な著書に「絵の中の人生」（新潮選書）、「恋する手」（講談社）、「明るい方へ」（朝日新聞出版）、「石の花」「時こそ今は」（筑摩書房）。最新作は、『夢さめみれば』（朝日新聞出版）。